

『伝える力』を育む授業の創造

～対話的な学習活動の工夫～

関原 寛明

小野真理子

野沢喜満子

1 主題設定の理由

◆英語教育の動向から

平成25年12月、文部科学省は、2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。そこには、グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として、小学校中学年はコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした活動型の外国語活動を、小学校高学年は初歩的な英語の運用能力を養う教科型の外国語教育を行い、また、中学校では授業を英語で行うことを基本とし、身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養うこと、高等学校では授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化させ、幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやり取りができる能力を養うことが示されている。小・中・高等学校を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養い、生徒の総合的な英語力向上を目指している。

それから後、第二期教育振興基本計画を踏まえ、文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」等を経て、平成27年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部会より「論点整理」が示された。そこでは、「言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、4技能を総合的に育成すること」をねらいとした現行学習指導要領の成果と課題が挙げられている。その後、外国語ワーキンググループにおける審議を経て、平成29年3月に新学習指導要領が公示された。中学校の新学習指導要領の外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次の通り育成することを目指す。（1）外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけるようにする。（2）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。（3）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」と示されており、教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱における資質・能力を育成することと整理されている。また、指標形式の目標はCEFRの枠組みを参照し、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やりとり）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の5つの領域において示されている。また、それらを達成するために必要となる語彙数は、現行学習指導要領に示されている1200語から、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語と示されている。新学習指導要領の実施により、5つの領域をバランスよく指導し、外国語による総合的なコミュニケーション能力を養うことが求められるようになるだろう。ちなみに、現在の第二期教育振興基本計画に掲げられている生徒の英語力の成果指標は、中学校卒業段階でCEFRのA1レベル程度以上を達成した中学生の割合を50%とすることとされており、第3期教育振興基本計画においては、更なる改善・充実が図られることとなっている。以上の動向を踏まえてみるに、今後の中学校英語学習者には、ある程度の語彙力と表現力を持ち、自分の伝えたいことを積極的に相手と英語を使って相互理解を図る力が求められていることが

分かる。つまり、自己のメッセージや意図を相手に的確に「伝える」力を育み、しかも、それが他者との英語によるインタラクションを通じて達成されることが求められ、教師はそれを意図的に仕組んでいくべきであると考えられる。ここに本研究主題を決定する意味が存在すると思われるので、「伝える」と「対話」を本研究主題のキーワードにした。

◆これまでの研究との関連から

**H17～19 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫
～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～**

本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、『伝える力』を生徒の実態に合わせて具体的に6つに分類して示し、それぞれの『伝える力』の向上を目指し、研究を行った。

**H20～22 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫
～伝えることへのレディネスづくりを意識して～**

H20～22年度までの3年間は、それまで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し、効果的な授業のあり方や指導法を探った。『伝える力』をより豊かなものにするために、伝える表現を思考するためのレディネスづくりに取り組んだ。また、『伝える力』の基礎・基本となるよう、帯プログラム活動も整備した。

H23～25 研究主題 『気づき』を促す授業の工夫

『伝える力』を伸ばすために、生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方や教師の役割等を捉え直した。生徒が自分の伝えたいことを表現のために、伝達に対する課題や目標に対し「問い」をもつことや課題達成のために「既習事項を活用する力」が必要となる。自ら学習する生徒を育成するためには、「問い」の発見と『気づき』の繰り返しが重要であると実感した。

**H26～28 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造
～振り返りを生かす学習過程の工夫～**

『伝える力』を育む授業の創造について、「自分が表現したものを振り返ること」や「よりよい表現を模索すること」の2点から迫った。他者との交流を意図的に仕組み、深く考える授業実践を重ねたことで、①活用できる言語知識の増加、②言語機能に対する意識向上、③相手意識の高揚が成果として挙げられた。「深く考える」授業を繰り返して行くことで、生徒は自分の表現したものを深い思考を通して改善しようとするようになり、「振り返り」を生かした学習過程を工夫することが『伝える力』を育む授業を創ることにつながるということが明らかになった。そうした教師が意図的に仕組んだ授業やその学習過程においては、既習知識を基盤として伝達効果を考えながら自己の表現の質を考える等、本校英語科が期待する生徒の姿が見られた。しかし一方で、生徒自らが言語知識を増やそうとしたり、言いたいことと言えことのギャップを感じたときに、もっている知識を活用して伝えようとする姿勢に課題があると考えられた。

◆生徒の実態から

本校には、単語や表現などの知識を豊富にもっており、大きな抵抗を感じることなくまとまった文章を書いたり、質問に対して適切に応じたりする力を備えている生徒が多くいる。また、学習に対して前向きで、授業に真面目に取り組む姿が大半の生徒において見られる。その一方で、「正しい答え」に固執し、失敗や間違えることを恐れ、英語を使って表現することに抵抗を感じている生徒も少なくないと感じられる。自由な発想でものごとを考えたり、自分から積極的に英語を使って情報を発信したりする意欲が低いとも考えられる。外国語教育においてコミュニケーション能力を養うことは目標の中核を成しており、「話すこと」や「書くこと」などの言語活動の充実と技能の育成は現行学習指導要領の課題でもあるため、改善を図る必要があると考える。以上を踏まえた時、自分の考えや意見、情報等を「伝える」学習活動を充実させ、それに主体的に取り組もうとする姿勢を持たせるための仕組みを作ったり、表現できたこととできなかったこと及びその理由について振り返らせる経験を積みませたりすることで本校生徒のコミュニケーション能力は養われていくと考えることができる。

◆『伝える力』の定義について

ここで、本研究主題のキーワードの1つである『伝える力』について、我々にとっての意味を定義しておきたい。これまでの研究において、本校英語科は『伝える力』を「自分の考えや意見、情報等を、身の丈に合った英語を常に更新させながら用いて、伝え合うことができる力」と定義してきた。新学習指導要領において「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーション」が目標に掲げられており、それを支える資質・能力と『伝える力』は重なる部分が多い。しかし、昨年度の研究成果や課題及び現在の生徒の実態を考慮すると、コミュニケーションを実現させる際には、その原動力となる「伝えたい」という意欲や積極性、さらには、目的や方略選択につながる「いつ」「どこで」「誰に」「何を」伝えるのかという意識を持つことは重要であると考えられる。したがって、『伝える力』を捉え直す必要があると感じた。そこで、本校英語科は『伝える力』を次の通りに再定義し、さらに新学習指導要領のねらいに沿う形で今年度以降の研究を進めるための意義あるタームにしたい。

本校英語科が考える『伝える力』の定義とは、「自分の考えや意見、情報等を、聞き手や読み手に配慮し、自ら進んで、目的や場面、状況に応じて身の丈に合った英語を常に更新させながら用いて、伝え合うことができる力」である。

2 研究の目的

『伝える力』を育むために、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びの具体的な姿とそれに必要な手立てを明らかにすること。また、その学びを通して育成した『伝える力』を見取る評価方法を探ること。

3 研究内容（全体研究との関わり）

平成29年度から全体研究では「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～『見方・考え方』を働かせた学びを通して～」という主題を設定し、3年計画で研究を行っている。初年度は学校全体で育成したい資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱でとらえ、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせた学び」について各教科で研究を進めた。2年次は、「見方・考え方」を働かせた学びの評価に重点を置き、生徒の学習調整を促す形成的評価の工夫と身につけさせたい資質・能力を可視化するための工夫について研究を進めた。そして今年度は、各教科で育成をめざす資質・能力が身につくような「見方・考え方」を働かせた学びと評価の一体化について研究を深め、さらに、教科等横断的な教育課程編成に向けて、各教科や総合的な学習の時間、道徳などの年間指導計画の見直しを行う。

（1）英語科における「見方・考え方」について

「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて」（平成28年8月）では、「社会や世界との関わりの中で、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、外国語を聞いたり読んだりすることを通じて様々な事象等を捉え、多様な人との対話の中で、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現して伝え合うことで思考していくことが重要である。」としており、また、「このような学習過程を通じて、学ぶことの意味や自分の生活、人生や社会の在り方に主体的に結び付けたりする学びが実現されることによって、学校で学ぶ内容が、生きて働く知識や力として育まれることになる。こうした学びの過程が外国語教育の『主体的・対話的で深い学び』であり、その鍵となるものが、教科等の特質に応じた『見方・考え方』であると考えられる。」としている。さらに、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）（以下、「中教審答申」）では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と整理している。本校英語科は、生徒に、以上に述べた外国語科としての「見方・考え方」を働かせた学習活動を積み重ねさせていくことによって『伝える力』を育むことができるという考えのもと、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を次のようにとらえる。

本校英語科が考える「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「生徒が自ら進んで英語で表現し伝え合うため、言語や文化を、自身の経験則や背景知識と照らし合わせながら、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて自分の考えや意見、情報等を形成、整理、再構築すること」である。

我々が育みたい「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の具体的なものとしては、例えば、人物を紹介する活動においては、「相手との関係を踏まえ、紹介する目的に応じて人物の情報等を整理及び取舍選択し、相手の興味関心に応じて話題を膨らませるなどして文章を組み立てること」である。また、議論の活動において育みたい「見方・考え方」とは、「議論すべき話題の背景や現状などを踏まえ、さまざまな立場や捉え方があることを認めつつ、自分の考えを伝え、相手を説得するために、集めた情報を整理しながら、伝えたいことが伝わるように、時には他者の目を借りながら、試行錯誤して自分の意見をまとめていくこと」である。

(2) 「見方・考え方」を働かせた学びを通して英語科で目指す具体的な生徒の姿

先に述べた通り、「教科等の特質に応じた『見方・考え方』」は「主体的・対話的で深い学び」の鍵となっている。「答申」では、「『主体的・対話的で深い学び』の実現」を「学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」と整理している。また、「深い学び」を「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう」と整理している。以上のことから、本校英語科では、「見方・考え方」を働かせた学びを通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が活用・発揮されて資質・能力が伸ばされたり、新たに育まれたりすることを英語科で目指す具体的な生徒像と考える。具体的には以下の3つの姿が挙げられる。

- ・英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、実際のコミュニケーションにおいて活用できる生徒
- ・英語で簡単な情報や考えなどを理解して、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる生徒
- ・聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする生徒

全体研究で目指す「新たな世界を主体的に創造する生徒」を育成することを、英語科では、「言語や文化を他者との関わりから捉え、目的・場面・状況等に応じて情報や自分の考えなどを伝え合う言語活動を通して、『コミュニケーションを図る資質・能力』を高める生徒」を育成することと言い換える。それを端的に言うと、「『対話的な学習活動』を通して、『伝える力』を高める生徒」を育成することである。「対話的な学習活動」とは、全体研究で言うところの「学習者」、「他者」、「対象世界」それぞれの間で行われる「対話」を指しており、「学習者」と「他者」、「学習者」と「対象世界」、「他者」と「対象世界」、さらに「学習者」と「学習者自身」とを結びつける授業の場面のすべてを表している。具体的には、課題提示や言語材料の導入場面、教師によるイントロダクションや教師と生徒とのインタラクション、生徒同士の会話ややりとりを含む言語活動、自己評価や他者評価、教師や他の生徒からのフィードバックなど、言語・文化の理解やそれについて自分なりの考えを形成すること、自己内省などが「対話的な学習活動」として挙げられる。言語活動について言えば、教師と生徒または生徒同士の双方向による対話といった「話すこと（やりとり）」だけでなく、聞き手や読み手への相手意識が必要となる「話すこと〔発表〕」、「書くこと」、さらには、言語材料や異文化の理解、まとまりのある英文などの読解を含む「聞くこと」や「読むこと」、5領域に及ぶと考えられる。

(3) 「見方・考え方」を働かせた学びと評価の在り方 <3年目の研究>

今年度の研究は、2年間の研究の成果と課題を踏まえながら、「見方・考え方」を働かせた学びを

実現させるための手立てとしての「対話的な学習活動」とその評価の在り方について研究を進め、指導と評価の一体化をめざす。

これまでの研究から、「見方・考え方」を働かせた学びにおいて、次の4点が必要な手立てとして明らかになった。1つめは、目標を確認し授業計画を示して見通しを持たせることで、生徒は自ら進んで活動に取り組み、課題解決に向かうようになった。2つめは、生徒の既有知識を経験則や背景知識と照らし合わせて考えさせる教師の発問づくりによって、生徒は知的好奇心や知的欲求を原動力として未知なるものごとに意味づけをしながら学びを進めた。3つめは、単元を貫く問いを設定することで、生徒は社会や世界、他者と自分との関わりについて考えるようになった。4つめは、パフォーマンス課題において目的、場面、状況を設定することで、生徒は相手意識を持って表現活動に取り組んだ。本校英語科では、「見方・考え方」を働かせた学びを実現させるための手立てとして「対話的な学習活動」を取り入れてきたが、他者との交流が意欲を向上させ、コミュニケーションの質の向上にもつながることが明らかとなった。また、教師は生徒の考えや意見を拾い上げ、まとめたり、さらなる発話を求めたり、他者の発話につなげたりといった、対話の活性化を促す役割を果たしていく必要があることも見出された。

「見方・考え方」を働かせた学びにおける評価については、各単元において育成をめざす資質・能力をCan-Doリストをもとに明確に示すこと、また、評価規準と基準を提示しておくことが重要であることが明らかとなった。目標を明確にし、教師と生徒がそれを具体的にイメージして捉えることができるようにしておくことで、教師は授業をバックワードデザインすることができ、生徒は学習調整をしながら学びを進めることができた。さらに、評価規準や基準が示されたルーブリックをもとにパフォーマンスを自己評価、他者評価することで、「伝える力」が可視化され、客観的に資質・能力を評価することができるようになった。その際、自分に足りない部分に気付いたり、現状を吟味し改善させたりするためには、教師や仲間など他者からのフィードバックが重要である。数値だけの評価だけでなく、どうしてその数値をつけたのかといった理由や根拠を記述したり、もっと知りたいと思ったことなどをコメントしたりする活動が学びの質を高めることにつながるだろう。

以上のことから、次の内容について、今年度の研究を進めていこうと考える。

- 生徒の発話を引き出す質の高い発問づくりをする
- 必要性、必然性の高いパフォーマンス課題を設定する
- 資質・能力を評価する規準とレベルを判断する基準をルーブリックで示し、生徒と共有する

今年度の全体研究では、各教科で身に付けた資質・能力を教科の領域にとどめるのではなく社会で活用できる資質・能力とするために、教科等横断的な視野に立った教育課程の編成についても研究を進める。そこで英語科においても、「対話的な学習活動」を通して育まれる「伝える力」が、総合的な学習の時間（本校では、SELF）で育成する資質・能力にどのようなつながりがあるのかということについて、年間指導計画の見直しを通して整理したい。また、Can-Doリストを年間指導計画における単元の目標に関連づけることで、各単元において重点的に育成したい技能領域、1年間あるいは3年間の学習到達目標の系統性を明確にしたい。Can-Doリストそのものについても修正を加え、中学校3年間の学習到達目標と小学校での学びのつながりを意識し、特に中学校1年時の授業改善に生かしたい。

4 研究仮説

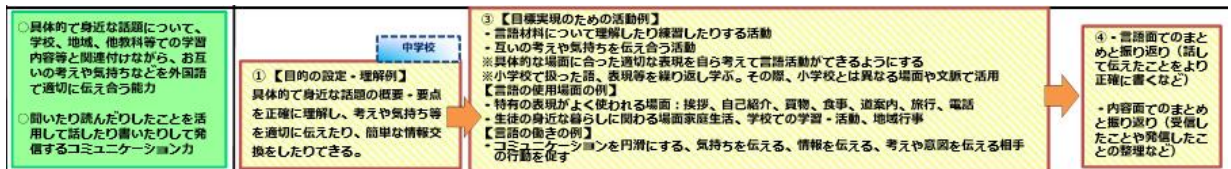
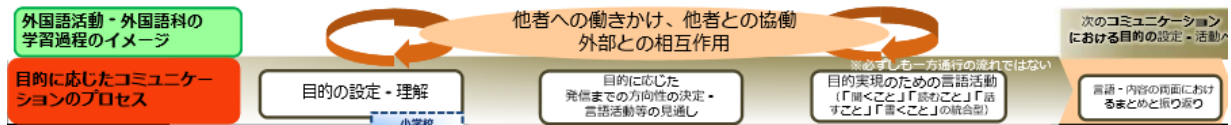
「対話的な学習活動」を計画的に設定し、その内容や評価を工夫することで、効果的に『伝える力』を育むことができるだろうと考える。

5 研究を支える取り組みとして

○外国語教育におけるアクティブ・ラーニングの視点に立った学びを推進する学習過程の確立

先に述べたように、「見方・考え方」を働かせた学びとは、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」に関わっており、「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（平成28年8月）では、以下の表に示した通り「目的に応じたコミュニケーションのプロセス」を「生徒が、①設定されたコミュニケーションの目的・場面・状況等を理解する、②目的に応じて情報や意見

などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの見通しを立てる、③対話的な学びとなる目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う、④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行うという過程」として説明しており、そうした学習過程を経ることで「学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動へつなげ、『思考力、判断力、表現力等』を高めていく」ことにつながるとしている。



本研究では、「見方・考え方」を働かせた学びを生徒に促すために「対話的な学習活動」を一単位時間内または単元内に計画的に仕組み、「主体的・対話的で深い学び」を通して『伝える力』を育成することをねらう。今年度の英語科では、特に「自ら進んで」、「身の丈に合った英語を常に更新させながら」伝え合う生徒を育成するという観点から、生徒に「見通し」を持たせて学習に取り組み、「対話的な言語活動」を通して「振り返り」をさせることに重点を置く。「見通し」を持たせるためには、単元内においては、CAN-DO リストなどに基づく「何ができるようになるか」といった学習到達目標を意識させたり、単元を通して生徒に意識させたいテーマやトピックに関わる発問を投げかけたりすることが必要になると考えられる。一単位時間内においては、言語活動におけるコミュニケーションの目的を理解させたり、そのために必要な語彙や文法事項などの言語材料を取捨選択しながらコミュニケーションの方向性を決定させたりする。その上で、実際の言語使用場面を想定したコミュニケーション活動を行わせるといったことが考えられる。また、「振り返り」について言えば、コミュニケーション活動の際は、生徒が言語をただ使うことそれ自体に目的意識を持つのではなく、言語を使って対話をした上で達成されるコミュニケーションの目的に意識を持たせたい。そうすることで、その目的が達成されたかどうか、達成されたら何が良かったのか、また達成できない場合には、自分の何に問題や課題があったのかに着目して振り返りをさせることができる。こうした学習過程を系統立てて実践し、積み重ねていくことで、生徒は言語の有用性に気づき、自ら進んで自分の考えや情報等を伝え合うことができるようになると思われる。

6 参考文献

- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年）
- 文部科学省 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年）
- 文部科学省 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（平成26年）
- 文部科学省教育課程企画特別部会 論点整理（平成27年）
- 文部科学省教育課程部会 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（平成28年）
- 文部科学省教育課程部会 外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年）
- 文部科学省中央教育審議会 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年）
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要（平成23～27年度）
- 山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要（平成28年度）
- 田中博之 「アクティブ・ラーニングの学習評価」（2017, 学陽書房）
- 管 正隆「中学校教育課程実践講座 外国語」（2017, ぎょうせい）
- 文部科学省教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）（平成31年）